

彼女の目が書面を追い、何度も何度も、確かめるように行き来する。  
やがてすべて読み終えたのだろう。

「……嘘よ」

ぼつりと、そんな呟きと共に、紙が床に落ちた。

「こんなの嘘……！ 嘘よおおおッ!!」

ルドミラは大声で叫び、その場に泣き崩れる。

ステファニアはルドミラにそつと近づき、紙を拾い上げた。触るな、とは言われなかった。それは手紙だった。

『ルドミラさまへ』

そんな書き出しで始まる、リエットの字で綴られた手紙。

——この手紙をあなたが読む頃には、わたしは投獄されているかもしれない。恐らく世間では、わたしたちの投獄について多少の騒ぎとなっていることでしょう。

わたしは、『銀の愛し子』が行う生け贄の儀式のことを、匿名で聖騎士団へ密告しました。おばあさまも、他の女たちも全員、聖騎士団によって捕縛されることと思います。

皆にはとても悪いことをしました。けれどわたしにはどうしても、自分を慕ってくれるあの小さな少女を殺すことなんてできなかったのです。

儀式の日時を詳細に知らせたことで、聖騎士たちはきつと、あの子を救ってくれるでしょう。一緒に楽園へ行こうとお約束したのに、果たせなくてごめんなさい。

でも、たとえ儀式が失敗に終わっても、わたしはあの子の笑顔を守りたかったのです。

ルドミラさま。どうかあの子を、よろしくお願いします。罪人となったわたしには、あの子を守ることはもうできない。だけど、わたしが誰より愛したあなたなら、あの子を幸せにしてくれると信じているから。

そしてもし、わたしがいつか牢から出られる日が来たら、その時はどうか、三人で仲良く笑い合うことができればと願っています。

——いつまでもあなたの幸せを。リエットより。

リエットは、ステファニアを殺そうとはしていなかった。

祖母や、仲間、邪教の教えに背いても、救ってくれようとしていた。

リエットが亡くなる直前のあの行動も、きつと祖母を守るためではない。ステファニアが刺されそうになったのを見て、無我夢中で祖母を突き飛ばしたのだ。

ルドミラの啜り泣く声が響く。彼女の傍らには、ダイヤモンドの首飾りが落ちていた。

そこに、在りし日のリエットが見えたような気がして、ステファニアの胸はやるせなさに痛んだ。

ルドミラが腕環の仕掛けに気づいていれば。あの時、リエットが死んでいなければ。

もしかすれば、違う未来が待っていたかもしれないのに。

ルドミラのしたことは、到底赦せることではない。だがリエットに向けるその想いだけは、きつとどこまでも純粹で優しい、彼女の真心だったのだろう。

『永遠の愛』

ダイヤモンドの石言葉が、どこまでも悲しく感じられた。